

太平洋戦争中の日本のボクシング界に関する考察——協調と抵抗

相模女子大学

木本 玲一

発表の概要

- 研究の背景
- モダン文化としてのボクシング
- 日本の軍隊とボクシングの関係
- スポーツ批判
- ボクシングの「有用性」のアピール
- 「武士道としてのボクシング」
- 「拳闘報国」の諸相
- ささやかな「抵抗」
- まとめ
- 文献
- 謝辞

研究の背景(1)

- 1937年 国民精神総動員運動
- 1940年 大政翼賛会設立
- 1943年 戦時学徒体育訓練実施要項（文部省策定）
- 1944年 興行等取締規則（内務省令）、決戦非常措置要綱
等々

これらは様々なかたちで戦時下における文化やスポーツを規定。「戦時下では文化やスポーツが抑圧された」というイメージ。たとえば・・・

かくて政治も外交も経済も科学も思想も家庭生活も映画も音楽もスポーツも、戦争に従属し、国防に基づいて存在せねばならず、国民は一個人としてではなく、国家とともにあり、国家の胎盤の中で永久に生きてゆくべきものだとされるのである(企画院研究会編 1941:23)

研究の背景(2)

- 戦時下の文化に関する諸研究(高岡 2015、ウチヤマ2019=2022、金子 2021)
- 戦時下のスポーツに関する諸研究(坂上 1998、坂上、高岡 2009、鈴木 2022)、軍隊とスポーツの関係に関する研究(高嶋 2015)
- 軍隊、政府 = 抑圧者、業界 = 被害者という一面的な見方が更新され、両者の交渉を含めた複雑な関係性や、一枚岩的ではない軍隊の組織文化、個々のスポーツの特殊性などがあきらかにされつつある。本研究はこれら先行研究と基本的な問題意識を共有しつつ、あまり研究されてこなかったボクシングという対象に目を向けるものである

モダン文化としてのボクシング

- 1930年代初頭のブームを経て、都市部を中心に、実践者、観戦者ともに、一定の規模をほこるようになり、攻、防、一体の「科学的スポーツ」として自律化する（木本 2018:3章）
- 大学などではボクシング部の設立が相次ぐ
- 右はボクシング雑誌の表紙を飾る人気女優、入江たか子



日本の軍隊とボクシングの関係

- 1923年（大正12年）、日本拳闘倶楽部の渡辺勇次郎が陸軍戸山学校でボクシングの実演
- 1925年（大正14年）、アメリカ大使館付の武官、N・ウォーレンジェ・クレア大尉が戸山学校でボクシングを教授
- 以降、軍はボクシングの研究をおこなっておらず、公的には軍とボクシングの接点がなくなっている（米軍と異なる点）。ただし陸軍戸山学校では、希望者に対して、正課外でボクシングが教えられることがあったとされる(中桶 1940:346)

スポーツ批判

- 小泉親彦（軍医中将、初代の厚生大臣）のスポーツ批判。徴兵検査で壮丁の体位が低下していることを憂い、既存の「スポーツは無意味の体力消耗」になっているので(小泉 1937:620)、「国民体位」向上に資するものにしていかなければならないと主張
- 他方で、武道は肯定的に捉えられたため、スポーツが「武道化」する契機となる（後述「武士道としてのボクシング」参照）

ボクシングの「有用性」のアピール(1)

- 明大のアマ選手、平林愛国は出征後に「弾は尽き、剣は折るの状況下に於ても、あく迄も敵を倒さねばならぬ歩兵に対して天のあたえた両拳」の有用性を部隊長にアピール。その結果、部隊内では「外来スポーツでなく立派に日本化された武士道的精神の下に」連日、将兵によるボクシングの練習がおこなわれたという(平林 1940)
- ここで主張されるボクシングの「有用性」は、『歩兵操典』などにもみられる陸軍の白兵主義傾向(森 2005)と呼応する

ボクシングの「有用性」のアピール(2)

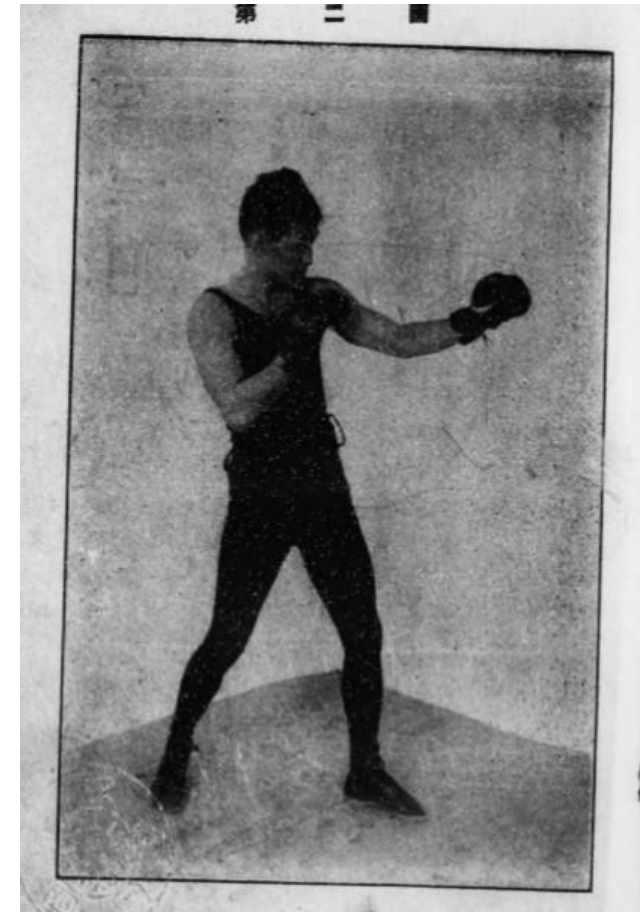
- 白兵主義傾向を前提とした「有用性」のアピールのなかでは、特にボクシング技術と銃剣術の親和性が指摘される

帝拳のプロ選手、岡本泉「私し（ママ）の居る部隊では下士官以下。数名で寒さが速くなつて銃剣術や剣道をするのにこれは良いと言つて。昨日は将校の方が練習の終る迄見て行かれました」(岡本 1942、下線は発表者)

衆議院議員、篠原義政「拳闘のもつ、非常時性をもっとよく生かし、即ち、忍耐力の養成、戦闘精神の昂揚、銃剣術の予備運動等を通じて、軍にもこの運動は、充分取入れられるよう努力せねばなるまい」(篠原 1941:5、下線は発表者)

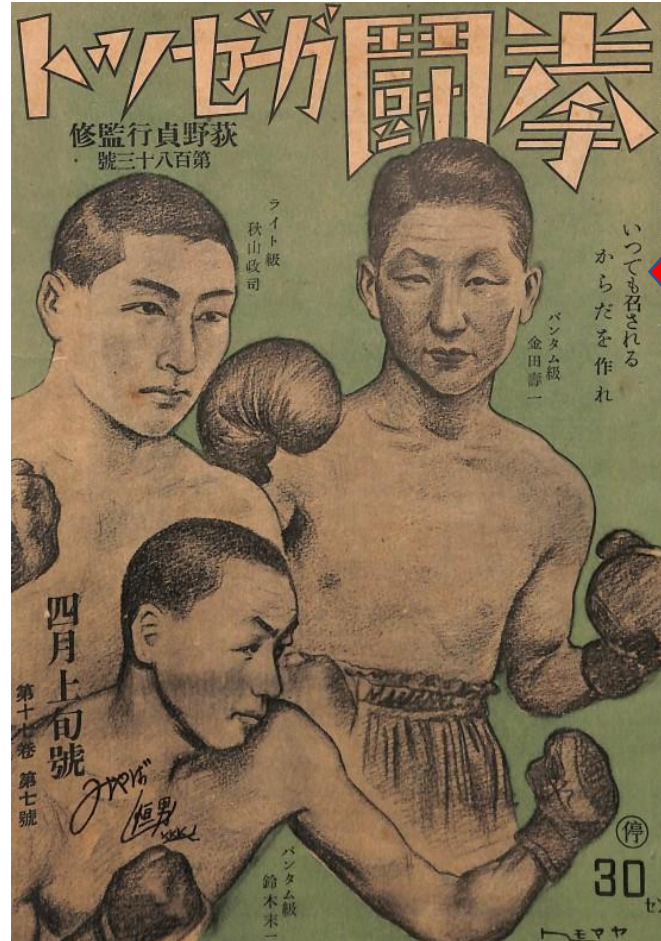
ボクシングの「有用性」のアピール(3)

参考：銃剣術とボクシングの親和性。
(資料左、沢田
1917:13、資料右、
渡辺、郡山
1923:12)



ボクシングの「有用性」のアピール(4)

- 専門誌における「ボクシングは頑強な身体を育てる」というメッセージ。スポーツ批判に対する反論でもあり、「国民体位」向上を目指す流れと呼応



ボクシングの「有用性」のアピール(5)

- 「国民体位」向上の流れを受けて、「国家の要求する戦時型の健全な心身」を養成するものとして「拳闘体操」が考案される(木本 1941:77)。ボクシング未経験者でもやりやすい「ボクササイズ」的な体操

順番と内容	注意点
1: 直突 (ストレート) 左右 4 回ずつを 2 本、その後左右連続 8 回	<ul style="list-style-type: none"> ・急速度で相手の顎を真直に突く ・突時は右ひざ腰腕を十分に伸し突力を大らしむ ・突た (ママ) 後は直に始めの姿勢にもどる (以下同)
2: 横打 (スイング) 左右 4 回ずつを 2 本、その後左右連続 8 回	<ul style="list-style-type: none"> ・腕を伸して大きく腰を中心に側面より顎を横なぐりに打つ
3: 突上 (アッパー) 左右 4 回ずつを 2 本、その後左右連続 8 回	<ul style="list-style-type: none"> ・臀を少しく屈げて相手の顎を下から上に突上ぐる ・突上げる時はひざ腰腕を充分伸し突力を大ならしむ
4: 鉤打 (フック) 左右 4 回ずつを 2 本、その後左右連続 8 回	<ul style="list-style-type: none"> ・腕を鉤型に屈指横打を小さくした要領で腰を充分ひねり側面より相手の顎を打つ
5: 前進直突 (踏み込んでのストレート) 左右 4 回ずつを 2 本、その後左右連続 8 回	<ul style="list-style-type: none"> ・右足より一歩前進して直突す ・右ひざ腰腕を充分伸して突力大らしむ ・右足も左足にともない直ちに一歩前進す (※)

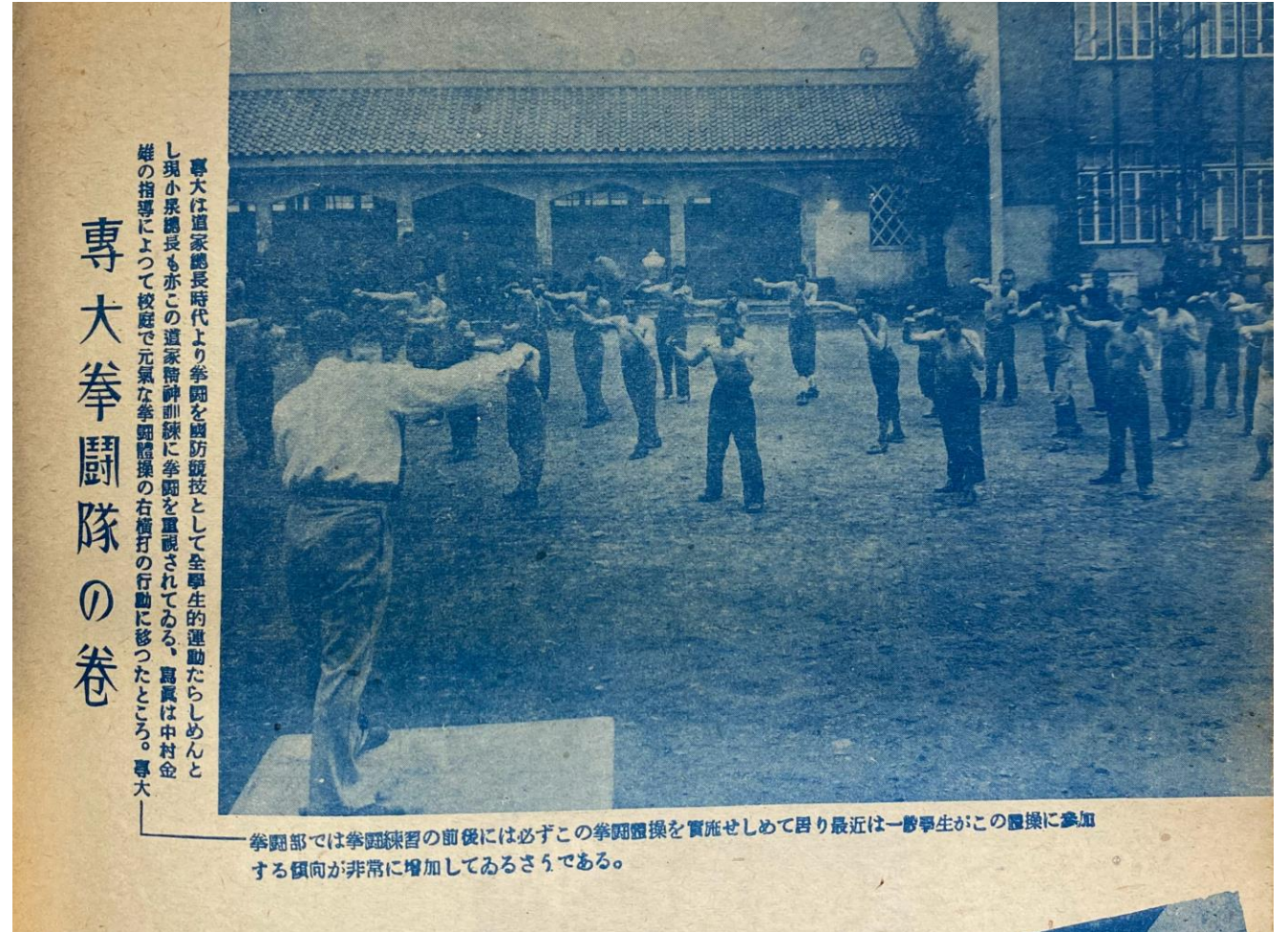
注意一: 「突」「打」はすべて最後の一瞬に最大速度を以って其後は脱力して直ちに始めの姿勢にかえるものとする

注意二: 初歩者は主運動各動作を一で突き二でもどる如く練習するものとする

(※) 右足と左足の表記が逆であると思われるが、引用元の記述通りに記した。

ボクシングの「有用性」のアピール(6)

専修大学で拳闘体操が実践される様子。(1942年の『拳闘ガゼット』(18-2)より)



「武士道としてのボクシング」(1)

- 1900年（明治33年）、桜田孝治郎（新聞記者）「我国の士風廃頹、所謂武士気質なるもの」が失われつつあるなか、「西洋士風の精粹たる拳闘術」を紹介する書籍を刊行(桜田 1900:5)
- 1926年（大正15年）、日本アマチュア拳闘連盟会長、堀内文次郎（元陸軍中将）「日本武士道精神を基とした拳闘技を鍛錬し、国家百年の計に備えよ」社団法人日本アマチュア・ボクシング連盟「50年史」編集委員会、1980:34)

「武士道としてのボクシング」(2)

- 田辺宗英（実業家、右翼、帝拳会長）「それに、私は、拳闘は、武術だと思っています。スポーツ的武術だと思っています。つまり、その合理的で科学的な拳闘は武術にまでいかなくてはならないのです。例えば馬術に於ける鞍上人なく、鞍下馬なしという境地、剣道に於いて生死に超越すという心境にまで至らなくてはいけないと思います。悟りに入らなければいけないと思います」（田辺、荻野、市原、平川、植村、小林、清宮、榑崎、奥村 1931:70）
- ピストン堀口（プロ選手）「日本拳闘はどうしても武士道に立脚したものでなければ」ならない（『読売新聞』1934/5/11朝刊）

「武士道としてのボクシング」(3)

- 戦時下、これまでの「武士道としてのボクシング」という観念が、ピストン堀口の攻撃偏重スタイルとして具現化される(木本 2018:4章)。堀口の戦い方は当時熱狂的に支持された
- 八重樫脇二（ピストン堀口の弟子、プロ選手）「ボクシングに対する見方が今とはまったく違ったんです。戦時色が強まるにつれ、私たちボクサーはボクシングの技術より試合に対する姿勢、武士道的な精神を求められました。ガードはおかまいなし、打たれても前へ出る玉砕戦法に観客も熱狂した。その頂点にピストンがいたんです」(城島 2003:90-91)
- 堀口は小西康裕（空手家）、藤田西湖（忍術家）らに教えを乞い、ボクシングの「武道化」を思想的、方法論的にも模索する(木本 2018:4章)

「拳闘報国」の諸相(1)

- 献金試合の実施

選手たちは無報酬で興行に出場し、経費を差し引いた利益の1万円は等分されて陸軍と海軍に寄付された。翌1943年（昭和18年）にも大日本拳闘協会主催で献金試合が開催され、同額が陸海軍に寄付されている(木本 2018:228-229)

英・米 滅撃！
国防献金豪華拳闘試合番組

時。昭和十七年五月三日（日曜日）正午十一時開始

所。兩國國技館

券	員	會
(除免稅場入)		
一、	二、	三、
〇〇	〇〇	〇〇
〇〇	〇〇	〇〇
(四階席)	(三階席)	(二階席)
		(指席)
		(贊助席)

所 賣 前

兩	神	銀
邊	標	座
國	田	
橋	橋	

相 國 三 小 京 本
携 兩 啓 針 開 本
茶 國 堂 明 省 針 開 本
屋 橋 堂 啓 明 省 針 開 本
店 社 堂 啓 明 省 針 開 本
店 社 堂 啓 明 省 針 開 本

主 催
東京拳闘聯合會
電話銀座二、三八八番
京橋區銀座西六ノ五

「拳闘報国」の諸相(2)

- 慰問巡業

白子陸軍病院慰問拳闘大會番組
昭和十八年八月十一日 於 白子陸軍病院

<p>一、試合番組</p> <p>氏名 出身地 試合 1 長濱忠次 (茨城) 四回 清瀬孝次 (福島) 2 後藤利也 (東京) 四回 永井三郎 (藤奈川) 3 鈴木末二 (埼玉) 六回 岩橋昇 (東京) 4 楠橋利光 (富川) 六回 串田晃 (茨城) 5 ビストン須口 (栃木) 十回 葛西憲榮 (平塚)</p>	<p>二、後援</p> <p>司會者 岡本不二 基本動作 岡本不二 主催 堀口拳闘道場 堀口恒男</p>	<p>審判 岡本不二 青木敏郎</p>
---	--	--

國防競技 體育獎勵
傷病將士慰問御招待

期日 昭和十五年十二月十五日(日) 正午開始 (晴雨不拘決行)
 場所 水戸市三ノ丸尋常高等小學校

拳闘試合プログラム

<p>主催 日東拳闘俱樂部 <small>日東拳闘俱樂部顧問</small> 柴田曉山</p>	<p>後援 不二拳闘俱樂部 いばらき新聞社 常總新聞社 水戸角道獎勵會 <small>水戸角道獎勵會々長</small> 矢島信太郎</p>
---	---

「拳闘報国」の諸相(3)

年月日	場所	内容
1938//6/2	衛生病院	慰問
1938/7/24	大野村臨時東京第三陸軍病院	慰問試合 (対葛西憲栄)
1938/8/19	牛込東京第一陸軍病院	慰問試合 (対石田一男)
1938/11/13	東京第三陸軍病院	慰問試合 (対楠本芳保)
1938/11/21	宇都宮陸軍病院	慰問試合 (対葛西憲栄)
1939/4/3	呉海軍病院	慰問
1939/4/18	北京新々劇院	慰問試合 (昼、対楠本芳雄: 夜、対柳四郎)
1939/4/19	天津劇場	慰問試合 (昼、対安田三郎: 夜、対久場清)
1939/4/30	大連	慰問試合 (対久場清)
1940/3/23	横須賀海軍病院	慰問
1940/8/20	本所公会堂	挨拶
1940/10/28	飯坂陸軍病院	慰問試合 (対、金光欣一)
1942/8/3	中部第二部隊営庭	慰問試合 (対、柳四郎)
1943/8/11	白子陸軍病院	慰問試合 (対、葛西憲栄)

ピストン堀口の慰問巡業(木本 2018 巻末資料)。堀口は徴兵検査で丙種となったことに負い目を感じており、特に「拳闘報国」には熱心だった(同:4章)

「拳闘報国」の諸相(4)

• “殺人ボビー”従軍願

日本で活躍していたフィリピン出身のボクサー、ボビー・ウィリスが、自分も「兵隊さんの為に働かしてください」と陸軍省に手紙を出したという「美談」（『読売新聞』1938年5月23日夕刊）

トとなつて下腹で毒を穿ける腹
 背をやつてのけたり、お定事件の
 の酒井検事の暴投が有罪判決
 を下される、駒澤グラウンドで
 は陸野大臣も現れて玉拾ひ競争
 に出場するなどこの日一日クタ
 クタになつて、さて慎重組に明
 日決動者が出ねばと心配させた
 眞実は陸野法相の球拾ひぶり

殺人ボビー 従軍願



殺人ボビーの名
 で知られてゐる拳
 闘の本郷豊町二
 の二坂本方ボビー
 ウィリス君は廿一
 日熱心な従軍志願の手紙を陸軍省
 に寄せた、その文面は片假名で
 「私は十年前フィリピンから
 来たのですが日本が好きになり
 ましたので永く居ります、ニュ
 ース映畫を見たり戦争の話を聞

いて支那兵が憎らしくてなりま
 せん、何でも兵隊さんの爲に働
 かして下さい、荷物を運んでも
 好いのです、怪我をした兵隊さ
 んに拳闘を見せて喜ばします」
 【眞実はボビー君】

二名大火傷

石油罐が爆発

廿二日朝七時半ごろ江戸川區小松
 州一四二瀬澤製材合資會社（工場
 主瀬澤作氏）工場で、ハンダ溶解
 作業中二石入り石油大罐に引火轟
 然轟が爆発し、職工の同町一〇八
 友部常紀（三）君は全身大火傷で危
 篤、同深川區扇橋一ノ二九黒板初
 太郎（二）君は両手に十ヶ月、同向
 島區宮崎町西二ノ九八庄司五左衛
 門（三）君は両手両脚に二ヶ月の火
 傷を負つた

ささやかな「抵抗」

- アマチュア・ボクシングのルール変更（※）。これに抗議して、慶應義塾大学拳闘部は、1943年（昭和18年）に「アマスポーツの純粹性がふみにじられた」として所属連盟を離脱（慶應義塾体育会ボクシング部 1976:59）

（※）ゲートルを巻いた学生服の両選手は、リング上であいさつを交わしたあと、リングを降りて、往復二百メートルを走る。再びリングに上がってセコンドの差し出す木銃を構えて、「やあ、やあ、やあっ」と刺突の型三回、そこではじめてグローブをつけて試合という次第（同）

まとめ

- 選手や関係者は、スポーツ批判に反論し、白兵主義傾向や「国民体位」向上を目指す流れにあわせるかたちで、ボクシングの「有用性」をアピールした。それはある程度定着していたボクシングのあり方（ex. 「科学的スポーツ」、モダン文化）が再定義される過程であった
- ボクシングに理解や興味のある上官がいる部隊や組織などでは、ボクシングが非公式に実践された。これは高嶋航(2015)などでも指摘されている野球などとの類似点である
- ピストン堀口に代表されるボクサーは「武士道としてのボクシング」を体現した。それは「スポーツの武道化」傾向とも呼応するものだった
- 「拳闘報国」（献金試合、慰問巡業等）が多くおこなわれた
- ささやかな「抵抗」がみられたものの、業界関係者はおおむね体制に協力的であった

文献

- Uchiyama, Benjamin, 2019 "Japan's Carnival War : Mass Culture on the Home Front, 1937-1945"Cambridge University Press.=2022 (布施由紀子訳)『日本のカーニバル戦争:総力戦下の大衆文化 1937-1945』みすず書房.
- 岡本泉、1942「我が部隊」拳闘ガゼット社編『拳闘ガゼット』17(3):19.
- 金子龍司、2021『昭和戦時期の娯楽と検閲』吉川弘文館.
- 企画院研究会編、1941『国防国家の綱領』新紀元社。(国立国会図書館デジタルコレクション)
- 木本順司、1941「拳闘体操に就いて」『体育日本』19(8)、大日本体育会:77-79.
- 木本玲一、2018『拳の近代：明治・大正・昭和のボクシング』現代書館.
- 慶應義塾体育会ボクシング部、1976『慶應義塾体育会ボクシング部五十年史』.
- 小泉親彦、1937「青年団長に望む」陸軍軍医団編『軍医団雑誌』287号、満州帝国軍医団:601-633.
- 坂上康博、1998『権力装置としてのスポーツ:帝国日本の国家戦略』講談社.
- 坂上康博、高岡裕之 2009『幻の東京オリンピックとその時代：戦時期のスポーツ・都市・身体』青弓社.
- 桜田孝治郎、1900『西洋拳闘術：防撃自在』穎方雑誌社。(国立国会図書館デジタルコレクション)
- 沢田石三太郎、1917『銃剣術教育指導法』軍需商会.
- 篠原義政、1941「拳闘は非常時下日本の推進力たれ！」拳闘ガゼット社編『拳闘ガゼット』15(6):4-5.
- 社団法人日本アマチュア・ボクシング連盟「50年史」編集委員会、1980『アマチュア・ボクシング五十年史』社団法人日本アマチュア・ボクシング連盟.
- 城島充、2003『拳の漂流：「神様」と呼ばれた男ベビー・ゴステロの生涯』講談社.
- 鈴木楓太、2022「戦時下の国民生活と体育・スポーツ」劉建輝、石川肇編『戦時下の大衆文化:統制・拡張・東アジア』KADOKAWA:239-268.
- 高岡裕之、2015「戦争と大衆文化」大津透、桜井英治、藤井讓治、吉田裕、李成市編集『岩波講座 日本歴史』(18巻) :223-256.
- 高嶋航、2015『軍隊とスポーツの近代』青弓社.
- 田辺宗英、荻野貞行、市原勝治、平川末男、植村龍郎、小林一夫、清宮満三郎、榎崎勤、奥村五十嵐、1931「帝国拳闘会訪問座談会」『文学時代』3(11)、新潮社:66-70.
- 中桶武夫、1940『軍神杉本五郎中佐』平凡社。(国立国会図書館デジタルコレクション)
- 平林愛国、1940「戦線の拳闘」大日本体育会編『体育日本』18(11):60-61.
- 森剛、2005「歩兵中心の白兵主義の形成」軍事史学会編『軍事史学』(41-1.2):271-287.
- 渡辺勇次郎、郡山幸吉、1923『拳闘術：ボクシング早わかり』海外旅行案内社.

謝辞

- この発表は、科研費基盤研究(C)の助成を受けた。

研究課題：「太平洋戦争期の日本のボクシングに関する研究：統制と競技の実践」(22K01940)